

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2025年 4月1日	
所属部局・学年	野生動物研究センター
氏名	西本千夏

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
兵庫県丹波篠山市
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
丹波篠山実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2025年2月18日 ~ 2025年2月19日 (2日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
特定非営利活動法人里地里山問題研究所(さともん)、鈴木克哉
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果:長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>本実習は、特定非営利活動法人里地里山問題研究所(さともん)が主催する獣害対策を学ぶものであった。実習は丹波篠山市にて2日間行われた。</p> <p>座学にて、日本各地の獣害対策、丹波篠山市の活動、および「さともん」の役割について学び、地域住民との交流、ニホンザルの追跡やニホンジカの個体数管理の方法も実際に行った。</p> <p>これまで獣害対策は、動物を追い払う、または個体数を減らすといった動物に焦点を当てたものと理解していた。しかし、今回の学びを通じて、獣害は人間側にも課題があることを初めて知った。特に、人によって対策方法や獣害に関する知識量が異なるため、人間側の理解が必要であり、行政と地域住民の連携が重要であると感じた。また、防護柵の設置といった対策が施されていても、その管理には人手が不可欠であることも実感した。屋久島実習でも防護柵の設置を見たが、丹波篠山市でも山の中まで防護柵が設置されており、維持管理の大変さを改めて感じた。実際の獣害および対策は、ニュースなどで知っていたものとは異なる点が多く、大変勉強になった。さらに、「さともん」はこれらの獣害対策を単なる対策にとどめず、地域活性化の一環として活用しており、そのポジティブな姿勢が非常に印象に残った。さともんが地域住民と行政橋渡し役となることで協力体制が生まれ、獣害対策だけでなく、地域活性化のイベントを開催するなど、地域全体を盛り上げる取り組みがなされていた。また、都市部以外の地位域では、人材の流出による人手不足や資金不足が問題となることが多いが、さともんでは、企業やアカデミアといった地域外の人々も巻き込んだ活動も行っており、活動がすべての人にとって利点となる体制で効果的に機能している点も素晴らしいと感じた。</p> <p>実際にGPSを付けられたニホンザルの追跡体験をした。運よく捕獲檻にニホンザルが収容された現場に居合わせることができた。個体数調整のために全頭は殺さず、オスのみを処分する判断や対応している姿が印象的であったのと同時に、獣害対策を行うためには心を強く持つことは大事だと思った。実際に、檻に収容されたニホンザルの怯えている姿を見ていると心が苦しくなり、処分に抵抗感を覚えてしまった。しかし、動物と人が共生していくためには殺処分もやむおえないことであるため、心を鬼にする大事さも学んだ。また、市の職員だけでなく対策に関わっている人々も現場に来ており、地域住民や行政、さともんの連携を実際に見ることができた。</p> <p>全日通して、料理がとてもおいしかった。高級であろうジビエ料理をたくさん食べることができ、ジビエの良さを改めて感じた。また、丹波篠山の特産である黒豆を用いた味噌も絶品であった(自分用のお土産として買いました)。地域住民との交流および特産品を用いた料理を食べることで、丹波篠山という地域の魅力を感じることができ大変よかった。宿泊した場所も、日本家屋で懐かしい感じがした。家は隙間が多いため、暖房がない部屋は凍えるように寒かった。また暖房もストーブで火の付け方が難しくとても苦労した。驚きだったのが、私以外灯油の給油の仕方を知らないことであった。田舎育ちが役に立ちました。</p> <p>本プログラムを通じて、一般的な獣害対策について学ぶだけでなく、獣害対策が行政や地域住民、さらには地域外に住む人々をつなぎ、地域活性化にもつながることを新たな視点として得ることができた。また、</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

実際に現場を見ることの重要性を改めて実感した。特に「問題を解決したいなら、実際に物事を行われ、変化が生まれる場所にいく必要がある」という言葉が印象に残った。私自身、野生動物の絶滅危惧種の保全に関する研究を行っているが、主にラボでの研究が中心であり、保全の現場に足を運ぶ機会は少ない。しかし、今回のプログラムのように実際に現地を訪れることは、動物や地域住民の現状を理解し、解決策を考える上で不可欠であると感じた。特に、アカデミアは一般社会との距離があるように思うため、自身の視野を広げるためにも積極的に現場と関わり、研究に活かすとともに、その成果を還元できるようになりたいと思った。



図 1



図 2



図 3

図 1. 座学の様子

図 2. 鹿ソーセージとイノシシ肉のタコライス

図 3. 檻に収容されたニホンザル

6. その他 (特記事項など)

本実習は PWS よりご支援していただきました。2 日間にわたり私たちを受け入れ、ご教示していただきましたさともの鈴木様、川添様、地元の皆様に心より感謝申し上げます。加えて、ジビエ料理を提供していただきました新田様に感謝いたします。企画・指揮してくださった關さんありがとうございます！